

823  
M8N2

戰江入楚

零漂

14

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七

七



冷標

元七歲

私十月ヨリ元八歳ノ十一月迄ノ事ナリ

十月奉為改院行沛八講

御門与尚侍御物詔

元八歲

二月任内大臣

二月春宮御元服

御案十一云

同元余日春宮受禪

兼香殿御腹御子立坊

同時源氏大納言任内大臣

致仕元大長為攝政太政大臣

歳六十二云

宰相中將任權中納言

權中納言四君腹女君可入内

歳十二云

二条院東院造作

花より里より何せんおかし

三月十六日明石上座

女君

宿曜師勘申源氏御子可有三人之由

中世よりいふ政をいふと位を極めしやうと云ふ事



少將君是

五月雨比渡學教里方給受

源氏君如元以泝京舍乃泝曹司夏

入道宮准太上天皇受

鄧封院司木支

八月檜中納言女入内夏

弘羊殿女御是也

源氏任吉詣吏

此日明石上同詣任者遙奉見源氏夏

九道將監任延尉夏

賜童以十人受

若君騎馬供霜雪

夕香之

雞波御稔夏

惟光以源氏君夢紙欲在明石上夏

齊宮歸京六条廊息而因瘡為危受

源氏請六条御息所給賣

送書於前齊宮吏

七八日以後御息取卒去夏

氣元六步成一

奉御文於前少宮吏

院御方念六条前放宮吏

源氏糸入道宮中前放宮入内受給事



玲標

戈八遷標

以可為卷名

花山奇為中名源氏云此七曜ノ十月より廿八日此八月より廿八日

河を流るゝふちのなかにありてわがえとぞ深う

此處此名は新あり付たり

奔私勘流湍投藏磅斤輶輶

文選 力四南却賦 戲水行出但立切

冷ハ水ノ深下也  
標ハシルニナリ

奔

以平三條氏其七葉明石より  
河京此事より次年丹八

第廿十一月  
三十七  
八  
六  
四  
二  
一

私記ニ廿八日此八月ノと家ハアヤリナシ女分ニ十一

月々此事は冬より夏

あやふくろしきうら

河清

伶

日上

明

集

音

鏗鏘

日本紀  
琴

今れをやくさるるやいふをたゞ同音之誤なりと爲す  
ゆゑ多し又明ノ字も之謂ふれ分明なる所なり  
右諸於遣丹阿那佐夜劫六竹葉色と云  
院乃みり此御事と  
河  
桐壺帝此御事と云乃御門

右諸於造丹阿ア耶ヤ佐サ夜ヤ劫ケ六  
竹葉ト色ト弓

院乃みよけ御事を

河  
桐壺帝北御宇  
上詔乃御門

一、為卿義為兄上右雅意即位之義追号不可勝斗中

間寛仁小糸院下如然漢書太公と右土皇と号

上乃曰小師古云天子此父號曰皇不豫治必不言帝也云帝

御門と訓ありて是を云ふと治事に帝位とのなり

りねとは由門とてより起るや是は帝佐りけりて魂と

おりまゝなり御門ノ字と副なり朱雀院ともあり水門

中冷泉院とあり 大泉院とあり 院北帝とあり 各所北院あり

源氏を故我と仰る人又の事昭石云々云々寛平

帝託寬平元年九月甲辰依御爰有役行御八攝之吏先帝

遷化之後稅云子勤力當果行也即任志遊獵不勒此吏可謂



不忠不孝甚者之先帝と弟に兄弟ひそく八海とおふりて  
幸はふふりておふりて先帝ハ仁和乃御門とふりて  
寛平元年九月に左記 光茂 と弟に兄弟ひそく八海とおふりて  
才より花鳥にば物河何事と也此例に本とふりてふりて  
いふ彼ふりてふりてふりてふりて

内わやうとくりしものつゝさうしるさけハタの罷を  
 ちりりいとゆるてゝあ泥相帝乃源氏并卿君ハつる

私桐壺と云延壽は此より延壽の女とて聖廟に遷す事  
竹々五種は晁公祐のてて決意若雨と云ふおのれを日  
上人より流り流るゝ水聲錦起りてあり

三月八日

河  
十月  
日本紀

明石島十月庚戌時義

世の人びとにふりかへて又源氏公のけいさつをいふ

大庄井病中 早稲氏と源一といふ方と病中と云ふこと  
あり 尚ほうらみしと云ふこと

御門を脱乃即ゆふ之と云ひさる所におかれひくる

主上ハ朱萐灰泥乃御造ト云とあり  
わちこゝにわたり

御門忠尚とて源の歟くじりなりや。おれけりて源氏と忠尚の  
 あくそんじに々々いふ所乃由きことまじや。あてのふむくわ  
 る中おれりて是より由京のすま改めたり。あから源氏とあつ  
 御あしきやうに源氏とて々々世々えびくありき。

主と御目乃於るこころおのれ建と大なる世にうけられ  
たふれおのれとたふれあり

世に中のみ  
がもろくそ  
なく  
よき世に  
あらず

主と此御印意也なり  
 あいあう字も一記  
 源氏天皇の御京と誰もくさるべき事  
 多く大抵れあうらにめと御京を以てしる人ありと云ふと云ふ  
 一ふにふを以ていなりと云ふ也

私此あいさしと云判中よりわろく花ノ勢もあつとも或河海  
乃勢之無やと云実より多し知しと云ぬ之に計勢より  
おり力あり此御公はつひ



乃々々々々

わゝゝゝせいの大寺もあけりやうのゝちひひる

勝月夜と云く筆を此より  
 之よりハ腕の又大匠之を  
 看る

婦少少人足也水飲之又兼荏也信至玄酒之乃水而具

[illegible]

古今圖書集成

名號分記之爲也

け 祥ふそハ世ふの邊之曉ニそ名納

となく之をせんせふゆゑとあるは、おのれを

朱荏苒

人々をひき

朱存此御初臆乃源氏子也朱存六

おひあそび

うゝれろゝれ

朱花山公一曉一物一之一見一

多らうと人

是と源氏を以て停る

[illegible]

籠乃とやより  
逆刃を今  
切念乃  
降し  
ひの  
ふ  
やと

朱蘆れふりハ源の麓をふり起てふやうなうんとふり

朱徒の如くきく海へ受てり」と修へて此の如く又を添

何のふくむにひてふれり

女房のやうな

朧乃海に源の中と修めゆ

ちんちん

らうやうに考へ

朱荏汁

なまのきこもる

又米菰の御刻之契り深きと云ふ事

を修めしむれど腕の版も由子でえんとて人々へ

本と作

ふろしき

脆乃切

抑ふらぬなぬやうきよになく

朱雀の肉と臍のふく

先づ又なれとさしと名をあらさるや一宮の

起

是ハ朱蘆池乃公ホ之ハカクニ  
 一ノトニハカクニニヤリト臍月

此朱崔跪と源氏より毛次よりひのふをえと屋くく之知也源氏

たゞて日つゝ乃ちけり

朱蔭功の家系を承る



くや弟と大臣は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
私云は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
源をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
我ふふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
さるは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
ありふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
あにけしおふさちと次へ人稱し給へる事と  
いふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
去文卿之服れし事  
其 冷泉院に在り  
去文元服し例

くや弟と大臣は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
私云は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
源をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
我ふふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
さるは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
ありふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
あにけしおふさちと次へ人稱し給へる事と  
いふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
去文卿之服れし事  
其 冷泉院に在り  
去文元服し例

おふさちと大臣は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
私云は臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
源をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
我ふふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
さるは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
ありふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
あにけしおふさちと次へ人稱し給へる事と  
いふは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
わくは臣をのつるおふさちと次へ人稱し給へる事と  
去文卿之服れし事  
其 冷泉院に在り  
去文元服し例



今上  
只今春衣たり  
菜香衣服たり

明車馬太政大夫

東香殿  
多し、まゝ、ふ、成、ふ  
尺、に、け、御、母、女、御、に

代りりりて多知つし事なるを

清氏忠大納言内左衛門尉小次郎のいぬ殺さるゝ事ありて

河  
月大天智天皇八年十月十五日  
以臣大膳冠後原躬於  
薄子

任内大臣此時位在左右大臣上  
去孝德天皇元年  
源子始任内大臣  
其時每大ノ字其六

後以官久叙至光仁卿亨發原良純與名承任之初次尤有次

天下令外官也。虎右大臣。國がまふりて。門をたはぬ。あふふふ。是  
 教。字りて。と。門をたはぬ。令。外。官。な。れ。は。あ。ふ。

私云元三云太政大臣此三人に力のよは田をたたり  
何ぞしれどもとらりしをいふなりといふこと今此友と云ふ載せ

大藏冠此ゆふたのりて令を撰きしより  
 いかれしゆれとて後任する人なりて中級  
 ありし令に不載えにせられ而字に又何き  
 小なり令より後代の事一勅さるゆ  
 かりしに依て闕たは乃外よりる也  
 友よりりて

やうに世の中はまううう  
事なきにううに  
河  
源氏名万枝と執事人なりと  
綴系智職く

私執政乃萬中北之強讓一々發上父下を接政させ彼等  
これ中々  
以  
致仕大卡執政東三条園白例に

報仕大夫之

天皇御元服後（花）  
初主

此時之勢政々乞を云  
 復辟妻 凶書云  
 復辟 ハツとハツと云と判と云

表を替りてちよ政をぬり替りて後の新政を改て闕白と称す

冷泉院十一少御之服有子即位子つと御子也子之服以後更禪

升時榜政之例。清和天皇貞觀六年。御之服。有曰。八年九月。

忠仁公良房孫之詔と勅の例と唯山方之六十三才齡



仁公此例よりあるはさるべき

一勅忠仁公良房攝政之例、六十三ノ年齢、其の各お遷之  
攝政異朝唐堯時舉舜為攝政殷湯以伊尹為阿衡周成王幼  
而即位外又周公且攝政漢昭帝又幼而即位博陸侯霍光奉  
武帝遺詔攝政如周公故吏怨乃以周公且霍光為監陂園白  
省漢宣帝云霍光猶執非幼主之故還政宣帝猶重其人令園  
白乃陂園白号自此而始  
本朝中哀天皇崩後皇后攝  
政平三韓而歸筑紫誕生皇子、在襁褓皇后猶攝政遂臨天  
下六十余年雖同正帝奉稱攝政其後履中天皇以平群作宿  
稱為攝政推古天皇太子府戶皇子、攝政齊明御宇皇太  
子中大兄皇子又攝政清和天皇幼而即位外舅大政大臣坂  
原朝臣良房、忠仁公奉父兄遺詔而攝政貞觀八年八月十九日  
始蒙攝政宣下、去天孝二年十月七日始行内外曆更是以人長攝政之初也尔降  
彼一門為執柄之臣、園白陽成天皇元慶四年十一月八日詔  
右大臣正二位坂原朝臣基經、昭宣公也、始為園白、元攝政是又園  
白之元始也昔行天皇五十一年八月以武内宿禰為棟梁

仁 無攝政号 履中天皇二年始置更四人 執政數次 卷田天皇代

平群木菟宿禰為攝政

やういふより位より  
うけむより位より  
人忠小より位より

私世終より位より ね時源氏より位より

又是より位より ね時源氏より位より

漢高祖戚夫人を寵すより位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

とせし時高祖戚夫人を寵すより位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

能ありし時高祖戚夫人を寵すより位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

の隠士より位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

より位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

て位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

より位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

より位より 漢高祖戚夫人を寵すより位より

漢高祖欲易太子呂后恐問留侯々々計曰願上不能教者天



下有四人々々者年老矣為書使辨士固請宜來於是呂后奉  
太子迎此四人々々至高祖置酒太子侍四人從太子年皆八  
十有余鬢眉皓衣冠甚偉上恠之問云彼何為者四人前對各  
言名姓曰園公角里先生綺里季裝黃公上乃驚云羽翼已成  
難動矣 史記

さしあがりしをたれ

契 汝は人老又若政しる例

た政たにたりし

河 天智天皇十年正月以大友皇子

始為太政大臣 忠仁公貞觀八年八月十九日始為太政大臣  
年六十三 此例死 弘太政官當安統八省及諸国天

下受悉交此官也故云都省本名乾政官

大政大臣師範一人後取四海其人則闕故則闕之官有  
從之權故非其人者常不任之又云職掌之官也

女中

汝は大臣と病なりしを

さしあがりしをたれ  
女中

さしあがりしをたれ

は相室中將

は相室中將は後  
は相室中將は後  
は相室中將は後

位今日元此官仍為令外此但其雲四年又至之  
相當從三位

十二は  
此奉小泉院  
一系り

は相室中將は後

は相室中將は後

私これ

さしあがりしをたれ

は相室中將は後

は相室中將は後  
は相室中將は後  
は相室中將は後



以中將 慈人少將 八郎君 弘徽殿女御 母同柏木  
夕旁大長室 母極崇大和女今之也方

大坂のりれりる

源氏れりる夕旁

は當時極園之父為前官以家内覧旨之<sup>時</sup>称大殿而今大改太長  
其身極政子息極中納言也号大殿也余不審れ重 物をきけ  
多あやいのあや くらりりり

大坂のりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
大坂と大坂といひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
極政大改太長人せれ人あひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

大坂と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
大坂と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
一都とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

わらわらわらわら

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる  
夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

中將中將やうじん

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

二条院とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる

夕旁と大坂とよひりる夕旁とよひりる夕旁とよひりる



常陸院の面なりけり人のあまふあるをいひききりやそ御号とゆふ  
院乃御子とぞん 院乃御分とて東院に御意は西門に御意は西の  
むらり里なりやれ 院のそふとて使ひる人々ともや

少くも一宮ありしす 院 院乃御子とて使ひる人々ともや  
おややふとぞん 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや

院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや  
院乃御子とて使ひる人々ともや 院乃御子とて使ひる人々ともや











なりけりこゝにゆきつゝや

突いゝゝゝゝゝゝゝ

私にりれていねなまそけなり

車中くや

光のやれゝゝゝゝゝゝゝ

帝よりゝゝゝゝゝゝ

皇女禊子

三余院皇女 陽明門院是也 御母中宮新子 御母園白也

長和二年七月十六日降誕即日被奉御叙是其例也

光れゝゝゝゝ

宰相君

石上りゝゝゝゝゝゝゝ

おろゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

入道忠孝のゝゝゝ

つれづれにゝゝゝゝゝゝゝ

源のわゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふもゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

私利に法度をつひのゝゝゝ

源氏

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

君り代を阿ふれゝゝゝゝゝゝゝ

はゝゝゝゝゝゝ

はのゝゝゝゝゝゝ

光れゝゝゝゝゝゝ

おろゝゝゝゝゝ

おろゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝ

私源のゝゝ子ゝゝゝゝゝゝゝ

ちゝゝゝゝゝゝゝ

月石娘のゝゝゝゝゝ

きゝゝゝゝゝゝ

もゝゝゝゝゝゝゝ

むゝゝゝゝゝ

諸ノ字れゝゝゝゝゝ

なけゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝ

あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

子りれゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝ

れゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

夜源のゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝゝ

京乃御史のゝゝゝ

御ゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝ

是より

いゝゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝ



子わい姓源をくやうけ事とうらふていやすぬなり  
 うれも子とふふれ切りのあやうけ事ともよむこゝ

ふれも子と子ふれ切なりなるうけあともよむこゝろ

あやし紀より御公より  
源乃時大公より

女君あそびにありて  
 名よ市子れ紫あそびを  
 ちふふ

へるれりぬし

さうして何事

昇  
世れならむと云ふこと  
阿婆と云ふ

花  
福らむといふに海にうまひあり但たふふ相ふもふきやと文

[illegible]

一々五五七と屋うあいをとりそろへ

私を爲すは、二、此の義を、といふは、中々、不亦、也。

ふふふふふふふふふふふふふふふふ

ちきりふれ世なひく世ふ振るぬゆそ

なれとてすゝめハナク女子とすゝめとやふと

あふれ何やう福ちきり中子盛るといふて

志之此卯より起て 程乃此義 卯より起て

福ら重なる常にかゝる為に心を盡す

つとふ屋へあはれさるゝはめ終ふとあはれまう

い候は乃御事爰よりてれり

女をさへ  
おとて源の邊へ

おのてうら何うそ  
おれさゆえならひあつさゆえ

わやうはひまわりなま  
あまのりゅう

後子屋小孫の室ひな次とく角之

中々うらやま

源のふゆ

源の初はあけふはめえ

ありあけの心

私云此れこそ海と云ふものなりと云ふ

花  
きよたつるひのうら  
はなをみれば  
はるけくあそびのま

そまゝに  
いふ  
なり  
云  
何  
之  
を  
著  
述  
に  
地  
方  
々  
々  
の  
所  
有  
す

海をくぐりて女をたのふよつとてそれいふをうゐてさ

又ふれなむくはるみんてほろり

ひく源氏物語のうへに人たふりてとてせむゆえに



河張教云に流すなりと其ノ字と署してて

源の極く多き事可々空山

てうりよてあふるしうちのやいふあふるれを  
こしなとわりしうちの

[illegible]

或御祝はるゝ

[illegible]

私はあををいふに花の葉よりうへに次は明石と  
の舟と海の中のふたつをいふはそれより同様に  
うへよりあをといふと海の中よりうへにあり

羿源氏刻之明石上此本此本

明名姫天下に名ありておのれに

弄卒尔之

明石を云源氏のふれげふれはち

[illegible]

秀  
明石是此志也煙乃才又つて幸可くふりて

そのふれふらわのうゝゝゝの秘乃  
羽衣をふらそよあ

移し居やう煙は夕へうあそひらんきりやう

是よりいふは思ひのこり

紫を源の御奉りうけあつて御奉る

なまさらうゝくも明名

多岐の道に  
 入りては  
 極の道に  
 入りては

5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525  
 526  
 527  
 528







天明石塘三月十六日誕生五月廿日ハ卒日ハあり

其五十九日ハ後之三月十六日ハあり  
何事といふありいふあり  
あゝいふありいふあり

男子ハ瑞男ヲ言ハれり  
さゝとていふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり

あゝいふありいふあり  
あゝいふありいふあり



夜あともあふにまけ

明石もみぢれまうさうさうさう

此御使なぐいやれよなく

む末よりれ中史んせい御れ夜

れ端やうさうさうさう

めれともこの女君れよななを

昇 明石とれま

おさくたぬぬん

わいこわいこわい源乃京より

さうさうさうさうのほむなわいこわいこわい

あせふさういんさうさうさうさうさうさうさう

源のよりさうさうさうさうさうさうさう

いん中よりいん

あつさうさうさうさうさうさう

これさうさう

わいれさうさうさうさうさう

おとれさうさう

あつさうさうさうさうさう

いんさうさうさうさう

なうさうさうさうさう

島師 日本紀 勇 徳武

ういんさうさうさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさう

明石もみぢれまうさうさう

あつさうさう

源のみを明石とれさうさう

あつさうさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさうさう

あつさうさうさうさう

あつさうさうさうさう



哥みなりとあらんやうらめあかき一途さふゆへ

女をあらうゆへ いめの源とたのめ

うらめとあらふとみれ いあといふやういふを

奥入 ちゆの浦よりきくふとみれしれをいふやにゆきつるや

ゆきふとみれ あやもいふはあやふとみれ

まきふとみれ あはれ源のうらめ

うらめとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

きくふとみれ あはれゆきふとみれ

やんといふ人 あはれゆきふとみれ

くはゆきふとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ

あはれとみれ あはれゆきふとみれ



あつちの門もわけがらなくふくみし月と入るゝと我  
なぬ人易しうひのりふふ

うゝぬりうゝうゝとんねこゝんぞうんぬ  
源の男それうゝひな  
けふ奇やと知るもやうふうこふさゆゑんねさうとれ後  
むなせゝ花ちりまれや性さやれわいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
と源の男それやうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

源のゆきをけしきし御心を

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

寛政十一年

此片卷に源氏物語のひは花女里（ちり）とある時  
 いふううと歌うたれは源のちよはりやうり決よ恒へこ  
 看れ月ちりくもらんやを詠めれとてはち女里（ちり）  
 ちりてあひわたりや

ていふ面として同様にけあひ

おゝみらゝあけり  
并さうてうになふる

ちね祇女と花に里々燈なり

源の花ちる里よつとくくくひのまきぬき

彼みちをわたりて馬を渡  
或花より里を越えし家の

しりあふるくさめいみき

し花ち里の水とて此は次より出づる名は此の

おやとあはひひ  
おとあはひひ

源の御本よりとりてしよは契人といふ常天の記と

又爲無事也  
 此人所共知

此の文をひくふもこれうろくを

或ふとなりし中御子もあはれみ言たよのきとひはな

ほろろ御子れうろくはりふゆ

私事ハ明名作爲此中ニ  
品御子トテテヨ

是二条に東院の造作のまゝ

寄二条北地小おろろにゆりさぬよりそ中々足るありき

より  
更なるを  
より

門をくぐりて河を渡りて家に入て造門表に於て可也



其の平よりより文成は終く終せらるるに 見花香

月内れり人共を 院の事を傳のれりるるれぬの事

ありし時よりいあらるる ころいし時よりいあらるる

女より貴にいらるる 勝れりるるに又の事あり

源由京の後朱蔭れらぬ 勝れりるるに又の事あり

れぬなりし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

中よりあらるる 勝れりるるに又の事あり

院をれりるる 勝れりるるに又の事あり

女御よりあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり

ままに御母女御 勝れりるるに又の事あり

ありし時よりいあらるる 勝れりるるに又の事あり



村戶負教

三宮各千五百戶

一品親王六百戶

三品親王三百戶

壹品親王百五十戶

入道と男女

友原道子三糸圖

花鳥小

院司判官代

廳  
召次取

任所

進物取

取庇

武者一

御臨身所

卷之四

とろろとろろ

御意に依りて

年以世より明て

入道

己の安し  
流ふなり

大抵の事柄を無くせりと

此乃其子也

御名成子成子之好

あゝ

源氏之乃て病り

世人

源の心をせよ

私惠存此漫

うゑて恥づきぬ

事終乃止

普於此乃一一以御之

てまのよき

中々受けが幾あるとやらせのふと

桑原の心たる人々を友とせし時良のうゝをとも見せ流るるを

あつたてふれども苦都やまのいふ何れもあらぬせりや



苦節之客此脚多ありや杉外は

世中此一箇うらをうけて

河執政長二之例

寬平九年七月三日權大納言兼左近大將藤原時平權大納言  
右近大將上卷藤原家先帝詔云少主未長間一日万機之政權

大綱言政原朝長可奏所請之上之受

延嘉十一年十二月

五日大綱言源昇友原道明

已上宣云可奏

弁官雜文書

私源氏を親政のたふつとて一官を職はるゑにとのた  
てたとたふつとて下も大なる計をて源氏を世を政と

腹中納之御むと

石改ちたれ息りの吹中物と二条桐玉此

曰君腹乃非吾之十二累少く衆のふ弘<sup>キ</sup>敷ふ仁のふ弘<sup>キ</sup>敷敷れ衆所<sup>ニ</sup>  
 おりいぬわゝらて 振政を政大行<sup>ニ</sup>げおとれ衆女<sup>ニ</sup>

芳林之文士中君

中世の文藝史

と百餘は三人婚夫多し一も中者も名目され今金葉書  
と名づけられ版にのりや夫一人多し一

其邪之文

頻里大石山

大物より此所より

紫上 毋按系大知玄廿

冷泉院女御

母後馬此水くく同ー  
し女は入内をきくく中君と云々  
家よりいりくく中、みせ

人々を導く

源氏物語

考邦々をわさめり源のお役なり

いしきゆんくは

弄  
文如御乃事

私あ子地へやうに去つて文と何うかは深の習原をいし

所々を以て程のさるゝ人共知ふ一書

御中 要要 いゝわらんやゆき

之秋恒若予歸兮予歸兮

弁源女八葉此秋也

御費開白く例も同財乃事ともあり

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

抄 假 阿 比

明名此人  
乙卯春  
參訪  
之

一  
 二  
 三  
 四  
 五  
 六  
 七  
 八  
 九  
 十  
 十一  
 十二  
 十三  
 十四  
 十五  
 十六  
 十七  
 十八  
 十九  
 二十  
 二十一  
 二十二  
 二十三  
 二十四  
 二十五  
 二十六  
 二十七  
 二十八  
 二十九  
 三十  
 三十一  
 三十二  
 三十三  
 三十四  
 三十五  
 三十六  
 三十七  
 三十八  
 三十九  
 四十  
 四十一  
 四十二  
 四十三  
 四十四  
 四十五  
 四十六  
 四十七  
 四十八  
 四十九  
 五十  
 五十一  
 五十二  
 五十三  
 五十四  
 五十五  
 五十六  
 五十七  
 五十八  
 五十九  
 六十  
 六十一  
 六十二  
 六十三  
 六十四  
 六十五  
 六十六  
 六十七  
 六十八  
 六十九  
 七十  
 七十一  
 七十二  
 七十三  
 七十四  
 七十五  
 七十六  
 七十七  
 七十八  
 七十九  
 八十  
 八十一  
 八十二  
 八十三  
 八十四  
 八十五  
 八十六  
 八十七  
 八十八  
 八十九  
 九十  
 九十一  
 九十二  
 九十三  
 九十四  
 九十五  
 九十六  
 九十七  
 九十八  
 九十九  
 一百

少  
志  
と  
な  
り

松三平はもとより、あつてもよく、甲より、や、玄年と、玄字



けしき小初て不感しこころもさうさうとありて  
ひ明名と年とくく人便衣小袖とて作るかあ年の懐妊とあり  
舟のふと懐妊よりてまの秋と年とまの糸指懐妊と

船あきまうて わうとまの海つるひなを  
のきりてまうてゆふ人便衣のひ 源の糸指をよれし事

いばうと人あう 歳すれ神室と  
あうりて人あうとやうて純々 歳すて或ひあうと

とまのひと 松あつてひとく 十列と 昇日  
わくあんととけうと

十列と東に人十人とあうて世にまの海とまの海と  
社名に名を国白の世にまの海とまの海と  
糸とまの海とまの海とまの海とまの海と  
をけしきと八幡海とまの海とまの海と  
海とまの海と十列とく 海とまの海と

月大に人便衣とく 源氏と人便衣とく ぬく人便衣と

おうりてまの海と

字にわと海と けしきとまの海とまの海と

あうりてまの海とまの海とまの海と  
身にわとくくあう ぬく人便衣とく ぬく人便衣と

あうりてまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と

あうりてまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と

六位と人便衣とまの海と  
とまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と

あうりてまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と

あうりてまの海とまの海とまの海と  
あうりてまの海とまの海とまの海と



て井の比佐より赤松王より

又或抄本有「二極有」云「紅花并深

つゝれおゝ乃御まゐりて且ハ御舟を御り所なり

河原元大匠勸賜童隨身受所見未勘書  
中右記云御堂入  
道殿令賜童隨身九条殿例  
今業御堂関白長徳三年給

長徳二年八月九日御堂殿示時元大長辭元大將ヲ日日以童六人  
為隨人三年十月九日勅元右近衛府主各一人近衛各三人

苑多ふえあり或説忠仁公白河よ信のふを河原左衛門号と云  
 又融公童身所の玉史なりといふるはもと此年信  
 ぬりともふべし物説よちの別と院共成下 一禪淨説

何より何ぞやと云うこと  
 夕暮より夜へ多きは此致

感くくくハ源の童身すく又振うりて位きくく又例  
 かしうりて浩博なりん  
 雲かきふくくくくくくく  
 心人の地未をうくく云 齊同



私共の満ちるもの故にうらやまなるはゆえなりと云

すさあつてはふふいをさうくわたり

いふくやうにこれこそあつてこそ

あつてはこそねがひます

くふりうゑなりて

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます

あつてはこそねがひます



すきうしるばんしやけふあり

私惟えはうしるる御

ゆれれねしうんとく徳とともなう清てのねれり

何れ此のふけりてあはれいふれ清ては惟えはるが

非れ御ちをちりあはれ清れ浦ふ所はあひの時の

まふとあはれ浦ふりて明るるうとえ初めひふ

清子りあはれあふしうとあはれしうとあはれあはれ

いふるせうとあはれあはれあはれあはれあはれ

難波れ御ちうとあはれあはれあはれあはれあはれ

なせふしうとあはれあはれあはれあはれあはれ

をいふしうとあはれあはれあはれあはれあはれ

私海中に七歌をいふれあはれあはれあはれあはれ

板七歌りて七歌をいふれあはれあはれあはれあはれ

かりはうしうとあはれあはれあはれあはれあはれ

仁徳天皇は古時懐てあはれあはれあはれあはれ

井子た大臣幸難波御前

河



河  
國史  
云

五

難波小娘と立冷標此由之なりとも示はざる所なり

五佐日記

万葉水廻衝石より所尾丸也

又之とて、懺悔儘水急形身をつゝとて、海井より紀伊に赴く

多々是とて志し水はるをそめ成る下は

一、什麼意思

[illegible]

あつちうらゐりよめ

源のち乃さゆなり

心  
ろ  
う  
く

あつた

かゝる字を辨てうちあふぬ

河上源の御書

威

一、  
あね  
あね  
あね

7<sup>18</sup>  
B2

以て七難波忠とてひたひたふまゝとてうゝをせんと

あふはくはかひにきりぬをまもりしなふれ

子之何事

舟之於水  
 如木之於  
 土

田義孝

月石上此御鞍之同契也乃地也事佛は流るる

松此本月より此後のゆゑは分てゐるやうに不不慮

源氏物語はあてて來の所後と云せりハ田舎邊といふ所なり

...

予、此の邊に於て其の故を尋ねて、此の故を尋ねて

とるべきものなり

此乃二子之河所經之處也

夕しにふたふたの雲を  
かきわけて

龍虎山志  
 卷之四  
 道觀  
 四  
 五

續後

近身大難言

[illegible]

私家傳子傳天口之志也

臣義隆より方外江に渡りて  
と云ふは、方外江に渡りて

て、  
入  
久  
乃  
も  
巧  
き  
ま  
あ  
と  
そ  
の  
あ  
つ  
け  
は  
な  
し  
た  
り

病を治すにふくむべきは、  
病の起る所を治すべし。

雨よりちとゆるしの雫をうけふるゝにぬれぬるをう

名ふくし 常龍波をうく あり面よりけのふおきなり

[illegible]

病者此其大似馬下馬馬

みづへ

うんく



阿の  
極女なり 昇回

こゝろは公卿の心  
同歩

并  
漢之工書於此之博雅

女は同じく宛方しを源氏兄のあつたやせのけしききき  
人々はそれより少くもさへなりとや

其うけを記しふなりぬる  
 あり記しふ候じきふ  
 ありと記しふなりぬる  
 ありと記しふなりぬる

私共位はよりてふと人なり公のまゝのり  
アヒルハ下へあむ成て人なり

此  
 乃の先より申したる此事りして何と云ふ此人の事なり  
 ありしに云ふ事なりと向ふぬの事なりと好むを云ふ

ありてを思ふとあひなふて教たりし  
 と此の心を居りてうめは

源の爲に師之衆を明と爲す也

河上之勢

源の由をいふに之程多し  
て源の御名をいふに之程多し

是より多ひくゝるためなり。而も、  
 弊不日小多なり。ふ、而も、  
 腸之可見、  
 三、

東之東を信つる次なり

早知今日之理也

花さくら今いまも花はなの心こころをわかれぬとて  
九く段抄だんしょうは浦うらをさるる人ひとの心こころをわかれぬとて

称名云々のやありけうゝ乃ては公あそふし  
 公と成たり  
 明名は抄よりて念成てゝゝ

関  
 ぼろくそ名此海乃をそ名年一約未のちりる記と云  
 通とゆく出るれめん 入るじき候うまふのがうん事を

ふいふと之又けりるれ色深きふとあゝぬをとを  
やふと深き女をふとぬきにふととゆふと  
ふとふとにふととふとふと深きふとふとのふと



冷泉院住持可然

又東よりりあり所へて東に舟文を御島示たされり所あり  
舟宮ハ御代より一度ノありのよしと

私母宮ハ御代ホ一歳ウリヨチ所ニ但御イモ海ヲ出されテ  
終リぬ大母院遷子ト親王ハ五十年余母院マデカサレヌ  
母宮トナリテ一ツ一ツバウラヒテ文ク誰コトスル次

かゝぬふり何とこひ  
源氏木むすけ

くわんせんとくしん

そゝふふなり

齊六家此即是不化筆也

松源氏乃つゝ有ち名せりて其息正保なりと云  
此松源氏乃つゝ有ち名せりて其息正保なりと云  
あつちふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

源之水息乃作達子兒主志

いゝ今又逢ふと我々も又碑をうゝんとすれ  
 碑をうゝとてうゝとてうゝとてうゝとて  
 なむとてうゝとてうゝとてうゝとて  
 むとてうゝとてうゝとてうゝとて

母院をいふ所なり

後は冷泉院へ移り、所々秋好中宮

御女御息所此水也

たはれ古来乃々也

河六系京極御息所此回居之

ふひふふふふふふ

河媚 困彙也 困瑕 文選

羶肉遊仙窟

川  
辭  
略

あまのこころ

六御息正此遠例之

片之部見所より

苑  
無宮子  
陽正  
福小

弘治壬午

けくふらふあね

好交はるゝあふひ

あまのうへに 源乃御女なり

きこゆせん

多海より五ヶ所内を流る

金山人之留之

宣統元年

胎息之  
古息之  
稱之

御之

源一忠惠社史著

角 ぬき じり

源乃利と云、源の如し

此海也。君之信之。收也。なり。



かへゆくとありては

是なりとて源の御意にこれ程の

あゝやありてふ事此程に御意にあらはれぬ

舟より御事なれ

みたり身なりと

お息乃より身なりと

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

さうてありてありて

是なりとて源の御意に

あゝ後人なりとありて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて

おれ今より身をまゐりておれ今より身をまゐりて



ひろやうか 諸字へ

さうらねふゆき

秋好れ事をねまふれなやう

と御息所はるふゆきと源のやういふおゆきなり

いづるうさゆき

御息所はるふゆきの切なるゆき

今うたふゆき

御息所はるふゆき又うたふゆき

うたふゆきはゆきけらゆき

ちうとるゆきとゆき

源の刻

ありゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源の丁れ門をうたふゆき

なりと御息所はるふゆきと病悩するゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

あさうゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋好れ事をうたふゆきとゆきとゆき

をうたふゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源の刻とゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源の兄はゆき

秋源乃御息所はるふゆきと大后殿はるふゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋好れ事を相意れゆきとゆきとゆき

私此秋好れと相意れゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源のゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋源のゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

はるふゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源の御息

ゆきとゆきとゆき

秋乃ゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

御息所はるふゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋又ゆきとゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

源とゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋好れ源の源の御息とゆき

ゆきとゆきとゆき

秋宮乃ゆきとゆきとゆき

ゆきとゆきとゆき

秋御息所はるふゆきとゆき

ゆきとゆきとゆきとゆきとゆき



其源のさきさきとあひし人せし

原れをくくともなり

源のあはれをきりてはくくともなり

所さきさきとあひし人せし

源の精進をきりてはくくともなり

元とあひし人せし

心妻れさゆなり

まゝは常ふ

輝好を知りて源のさきさきとあひし人せし

うつゝと御せり

源の輝好のさきさきとあひし人せし

あゝと御せり

ちよとあひし人せし

人原れをきりて源のさきさきとあひし人せし

あゝと御せり

源のみなり

ありと御せりて源のさきさきとあひし人せし

ありと御せりて源のさきさきとあひし人せし

ありと御せりて源のさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

源のさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

わつとあひし人せし

源のさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

源のさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

源のさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし

そとれさきさきとあひし人せし







あつてつゝれさやうぢ

ふち東京極なりしと

山崎れ入おのてき

今東京は東京の極なりしと

範朝藤

おのれ入おのてき

祢りさつらと

祢乃かひやうと

おれーおあやうと

御書所へ祢乃の親子

乃ゆ中をい

無家もと親さひ

乃お親御時おさうと

母れおまのり

少宮女御

松尾集

世よさうと

乃お親御時おさうと

例なり

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと

乃お親御時おさうと







こゝの御ありてあるて

又源の初れさういふのくむき

落雲よりけしきと信ふれよとこれの御を申すは源忠  
光の初れと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

源の初れと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと  
源の初れと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

すきま秋の中まきと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと  
源の初れと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

おのれと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと  
源の初れと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

後をふと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

是より又源の初れと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

女君と信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

入道宮と信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

入道宮と信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

指中細と信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

指中細と信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと

あやめと信ふれよとむきと信ふれよとむきと信ふれよと





是と云ふは御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
なり奉りしに申されしをあらはれしものなり  
は好むたものなりと云ふ御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
まゐりしありしなり  
并 乃通ふれしなり

私書云、御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
なり奉りしに申されしをあらはれしものなり

是と云ふは御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
なり奉りしに申されしをあらはれしものなり

是と云ふは御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
なり奉りしに申されしをあらはれしものなり

并 奥にすべし事大に改む勿論にそふに

是と云ふは御公にすべし事大に改む勿論にそふに  
なり奉りしに申されしをあらはれしものなり

陽明門院誕生長和二年七月皇女我御方良  
御公にすべし事大に改む勿論にそふに

私河内アリ







